プッアプッテス
KUMAMOTO

文化が舞い、伝統が薫る
——くまもとの神楽

絢爛豪華な衣装を身にまとった舞人たちが繰り広げる、優美でしかもパワフルなパフォーマンス——。一月二十七日から二十八日にかけて、阿蘇郡波野村に伝わる中江岩戸神楽が完全復元され、熊本県立劇場で上演されました。昼夜を通して全三十三座が一挙に公演されたのはわが国初めてのことであり、意欲的な試みとして全国から注目を集めました。県内各地では現在も二六〇を超える神楽が行われています。これは「神楽組」と呼ばれる保存会の数で、近くの神社をまわり祭りの際に演じられます。これらの神楽はそれぞれの組で内容が違いますが、その伝承のしかたや衣装、舞い方の違いからいくつかの系統に分かれます。足元で確かに受け継がれてきた文化。「古いもの」と最初から敬遠せずに、ちょっと神楽の世界を覗いてみましょう。

矢部町の矢部男成（おとこなり）神社少女神楽

—神楽の原点
巫女神楽

神を招き、神の託宣を聞く技を芸能化したものが神楽の原型と考えられています。

巫女神楽では神は巫女の体に移り、託宣を行います。巫女は神を招くために舞い、神憑りの状態になります。これを洗練させ、芸能化したものがこの神楽で、巫女神楽は神楽の原点といえます。後には人が神に奏上するものに変わり、採物と呼ばれる扇や榊などを手に持って舞うようになりました。県内の各地に分散しています。

—国津の舞が魅力
肥後神楽

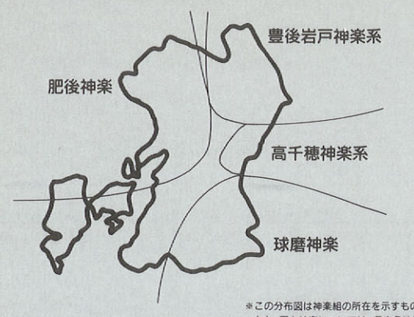
県内に伝承されている二六〇余りの神楽のうち、二二〇近くがこの肥後神楽ですが、いつ頃どのようにして伝わってきたのかそのルーツについては、よく分かっていません。主に、県北・県央に伝承されています。

十二座の基本演目のうち国津二天の舞と呼ばれる座は、着面の舞で、鬼の面を付けた大国主命と直面の神官が問答を行うというストーリー性のある舞で、見ていて楽しいものです。一般に着面では神の役を演じ、面をつけない直面の舞人は人を演じます。他の舞は刀、弓を手に持って舞う採物舞で、刀、弓を持って舞うのは、神様に奉納する際、身を清めるためと考えられています。

三加和町の山森神楽

波野村の中江岩戸神楽

熊本県神楽分布図



※この分布図は神楽組の所在を示すものです。なお、巫女神楽については、県内各地に分散しているので特定の地域を持ちません。

—神話を中心にした演目
豊後岩戸神楽系

幕末から明治にかけて、県境に近い大分県竹田や大野郡から入ってきて、県内では四か所で伝承されています。この時代になると神楽の目的も神に奏上するものから人に見せるものに変化してきていたと考えられます。

この系統の神楽は、早い動作と、大きくかつ優雅な振りが特徴です。演目は、三十三座あり、採物舞と風土記、日本書紀に出てくる神話を題材とした着面の舞で構成されています。演目の数が多く、しかも伝承者が高齢であるだけに三十三座を通して舞われることがなく、伝承そのものが危うい状況にありました。今回中江岩戸神楽が完全復元上演されたことは、記録として保存されると同時に後世に継承していくための大きな契機となり、他の神楽の刺激になったことはいうまでもありません。

—主に美しく飾りつけた部屋で舞う
高千穂神楽系

神話の里、神楽の里と呼ばれる宮崎県高千穂に伝わる神楽。熊本県には阿蘇、上益城、八代等の宮崎県境に近いところに伝承されています。三十三座で構成されており、演目も豊後岩戸神楽と共通するものがあります。内容も神話を題材にしていますが、風土記、日本書紀の内容に合うものが少なく、豊後岩戸神楽より更に古いものと考えられます。なおこの神楽は民家で舞われることが多く、クモと呼ばれる天蓋をつるし、エリモノと呼ばれる切り絵で美しく飾った部屋で行われます。

蘇陽町の二瀬本神楽

—発祥不明。球磨地方独自の神楽。
球磨神楽

他のどの神楽の系統とも異なる、球磨地方独得の神楽。足拍子を踏み、神憑り的な動作が多いのが特徴で、以前は球磨全域で舞われていたそうです。しかし、後継者不足から舞を統一し、現在は、一つの保存会で球磨全域の神社を回っています。

人吉青井阿蘇神社の球磨神楽

県内の神楽には地域によってさまざまなバリエーションがみられ、いかに熊本の地域文化が豊かであるかが分かります。この豊かな文化を残していくには、その地域に住む人たちが、自分の身近にある文化に興味を持つことが大切ではないでしょうか。あなたの近くでは、どのような神楽が残されているでしょう。さあ、今度のお祭りには近所の神社にでかけてみませんか。